My Favorite in Harp 's song

ハープ　私の1曲

第6回　ハープ奏者／講師
小俣 有希子　『ヘンデル：ハープ協奏曲』

セピア色の楽譜がそこにあった。それは、彼女の音楽人生の始まりでもあり、凝縮でもあった。手書きの楽譜。タイトルには、欧文で「ヘンデル」とある。奏者として講師として、まさに収穫期を迎えつつある小俣さんが選んだ1曲は、意外にも古典派の有名曲であった。巷間、マックスウェルの「引き潮」を弾かせたら絶品だとも噂される彼女には、この曲への大きな思い入れがあった。

文明の利器。今やデジタル・チューナーで調弦するとか、楽譜をi-padに入れて利用するとか、これから弾く音楽をチェックするのにはユーチューブを使うなど、時代は実に便利になった。しかし、ほんの数十年前にハープを学んでいた生徒たちは、現在から比べると全員“苦学生”と呼んでよかった。コピーなども汎用機ではない。写譜が原則。しかも原本を持っている人に、わざわざ借りに行く。不明瞭な箇所もそのままになっているから、訂正もされぬまま。そこには、ダウンロードのダの字もない。あるいは、先生から与えられた譜面をありがたくお受けし練習するも、やっと訪れた直接指導の機会が巡ると、先生から「そこは違う」と厳しい指導が入る。振り返ると、先生の方が間違っていた。辛いことや面倒なことが多かったけれども、そんな大らかでやさしい時間が流れていたという。ヘンデルを弾くことになったのは、高校3年4月の学内演奏会だった。しかも人前で本格的に自分の演奏を聞かせるのは、初めての経験だった。国立音大を出た小俣さんだが、中学・高校は上野学園で故ヨセフ・モルナール氏に師事していた。今まで大学生にしか教えていなかったモルナール氏が、学内の欠員から中学・高校のハープも受け持つようになったことで、小俣さんもちょうどモルナール氏の指導を受けることになった。

当時、同氏の指導は厳しく、鉄拳とまではいかないが、手の甲をビシっと叩かれて注意を受けたり、集団で指導を受けていたため、大勢の前で叱られたり、よく泣いている生徒も多かったという。一見受け身と思われるかも知れないが、昔は誰もが先生から「これを弾きなさい」と云われたら、それを黙って弾くのが当たり前。そんな時代だった。小俣さんがくだんの演奏会用に先生から渡された曲、それがヘンデルだったのだ。

当日は、母親も会場に身を隠すように娘の晴れ姿を観に来ていた。イケメンで、ライオン&ヒーリーからハープ構造の講義にやってきていた技師クリスチャンセンさんの顔も見えた。あがった。だが初めての人前での演奏会で、言いようのない高揚感が湧いてきた。音楽家・小俣有希子の誕生の瞬間だった。思えばモルナール先生の選曲は、気付かないでいた古典派音楽が好きな自分を覚醒させてくれた。「先生、ちゃんと見ていてくれたんだな」…色褪せた楽譜には、一音一音、写譜に費やした時間と苦労が克明に刻まれていた。彼女にとって、いまはそれら全てが愛おしい。

EVENT SQUARE　イベント・スクエア

- 2/15 2/16　Chifumi（レバーハープ）　北九州市・黒崎ひびしんホール大練習室
- 2/22　吉野直子（ハープ）　東京・サントリーホール（小）
- 2/23　坂上真清（ケルティックハープ）　東京・高円寺Grain
- ＼注目!／ 4/5 4/11　マイケル・ルーニー、ジューン・マッコーマック&ミュージックジェネレーション・リーシュ・ハープアンサンブル　日本ツアー2020 大阪、名古屋、横浜
- 5/23　梅津三知代（ハープ）　東京・東京オペラシティリサイタルホール

The Last Chorus

●ヴィクトール・ハルトバヌという、ドイツの若き名手が2月11日に来日します。現在、オーストリアの音楽院で教鞭を執っているほか、ベルリン国立歌劇場への出演、ダニエル・バレンボイム、ズービン・メータ、サイモン・ラトル、グスタボ・デュダメル、プラシド・ドミンゴらとの共演経験をもつ本格派。銀座十字屋では、マスタークラスの開催と店内のミニ・コンサート+ハープ選定会なども予定しているようなので、ぜひチェックしてみて下さい。

●Harp Lifeでは、ハープにまつわるコンサートやイベントの協賛／協力を無料で行っております。過去イベントでも、多くの成果を上げました。事前PRとして誌面もしくはWEBのHarp Lifeで告知します。但し、実施日3ヶ月を切った情報は、扱いかねますので予めご了承ください。お問い合わせ→ harplife@ginzajujiya.com
☎03-5635-3380（平日10:00−17:00）

●本誌と姉妹メディアであるハープライフWEBが好評展開中です。ぜひアクセスしてみて下さいね。

情報寄稿先：harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義

A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

02
2020

TENTH ISSUE
Vol.10

MIA

IEUAN JONES Talks

編集長インタビュー：イオン・ジョーンズに訊く

日本人ハーピストに欠けているもの

英国を代表するハーピストであり、教育者として王立／公立の音楽大学で30年以上にわたり教鞭を執り、多くのハーピストたちを生み出してきた。最近話題になっている英国王立楽器検定も、試験問題の作り手・試験官・アドバイザーとしても活躍してきた。そんなイオン・ジョーンズが、草加ハープ・フェスティバルに審査員として来日した。長年、同フェスティバルでの審査を通じ、日本のハーピストたちを多く見続けてきた彼へ、ストレートに質問をぶつけてみた。

English Harp Invitation

英国ハープの誘い

世間は、ラグビーのワールドカップで日本の選抜チームが、まさにワンチームとなり強豪上位に食い込んだことで、大いに盛り上がっていた。ラグビーとハープ。水と油のように見えるけれども、戦後日本がゼロから再スタートをきってから、日本人の心の支えとして文化を醸成してきたことで共通している。また、日本人には体格の問題もあって手に余るという点も。その後、日本人も体格が向上し、どの分野でも世界レベルで活躍する人々が増えてきた。ハープは、どうか。今回、草加のコンクールで、ひとつの疑問が湧いた。優勝者は、アメリカ人だ。しかし、聞くところによれば、韓国系だという。つまり、そこには日本人と決定的な体格の差は一切なかった。このところ、日本人のエントリーは長らく優勝していない。それは世界のコンクールでも同様だ。

本当のところ、日本人ハーピストの腕前というのは、世界レベルでどの程度のものなのか。

イオン：日本では、ヨセフ・モルナールという熱心な教育者が来日し、その指導の下、多くの有能なハーピストが生まれました。その教えも的確だったのでしょう。今や世代的には第三世代にあるといえるが、コンクールにエントリーしてくる奏者の全体的なレベルは、技術的には欧米のそれとほとんど遜色ないと、言い切ることができます。ハープの性能そのものも向上してきているから、音だけを聴いていると数十年前と比べたら雲泥の差なのです。だが、日本人に決定的に足りないものがあります。それは、「表現力」です。

一概に表現力と言っても、どこか観念的でもあり、どうすれば身につくのだろうか。

イオン：奏でる音楽自体が、西洋のものです。そこに籠められた文化・歴史は、曲に漫然と溶け込み、曲がどういう背景と意思をもって作られたかを知るのに、その国の文化への理解は役に立ちます。ですが、他文化の人でもそれらを正しく学び、想いを馳せて自分が得心したものを、楽器を通じて表現することはできます。その際、その曲をあなたがどう感じ、他の人へどう伝えたいかという気持ちが、最も大切なのです。それは、演奏するあなたしか気付くことはできないし、先生から「こう弾きなさい」と云われたように弾いたところで、聴き手には全く響きません。能動的な感情からしか本物は生れないからです。

受けた教えを黙々とこなし、修練に没頭する。それは、日本人の美徳かも知れないが、自発的に思いの丈を公然と晒すことには、全くもって不得手である。むしろカラオケでマイクを離さないタイプのほうが、同じ力量ならばよりアピールするということかも知れない。どういう心構えが重要なのだろう。

イオン：そろそろ楽器を「習う」のではなく、「学ぶ」という姿勢が必要かもしれません。技術を伸ばすだけなら練習あるのみです。ハープは表現者のための楽器。芽生えた感情は心にしまっておくのではなく、シェアするためのものだということを忘れてはなりません。

B' zの曲が、頭に巡る。♪ゴールは、そこじゃない…。ラグビーも体格差をスピードや知略で克服し、これが日本のラグビーだと世界に発信した。ハープも、同じだ。超えるべき壁は、むしろ我々の内面にある。イオンさんは今も「大きな音の出るハープが好き」と、少年のような眼差しでハープに向かう。表現力とは、時間さえあればハープを弾きたい「意欲」そのものなのかもしれない。

Alis Huws In Japan

English Harp Invitation
英国ハープの誘い

英国ロイヤル・ハーピスト、アリス・ヒューズ来日

“愛らしい台風”が過ぎていった。そんな表現がピッタリだった。天皇陛下の即位式に、英国のチャールズ皇太子も参加し、それに帯同する形で、いわゆる「ロイヤル・ハーピスト」であるアリス・ヒューズも来日した。警護の観点から、皇太子のスケジュールは伏せられ、よって彼女の来日もギリギリまで知らされなかったのである。英国大使館でのレセプションはもとより、九州から神戸と、親善のための音楽交流と、アリスは数日で一気に日本の半分を精力的に回ってきた。それを支えた周囲の苦労も、これまたたいへんだったようだ。しかし、「まるで、台風のようだったけれど、彼女はとてもチャーミングで、フレンドリーだった」という意見が大半だった。

東京を旅立つ数時間前にもアリスは銀座にやってきて、少ない時間ながら観光を楽しんだ。そんな中、少しだけ話ができた。なんといっても、ロイヤル・ハーピストという存在である。選ばれしハーピストであることは何となく判るが、いったいどのような経緯を踏んだら、任命されるものなのだろうか。

「まずは王立アカデミーの要職や、歴代のロイヤル・ハーピストなどから推薦を受けた人がオーディションを受けます。実技は思ったほどは多くなくて、むしろインタビューに時間がかけられます。双方意義がなければ、およそ2年務めます。延長されるケースもあります。そして皇太子が公式に赴く場所での演奏をしてゆくのです。とても楽しいですよ」。

皇太子専属のハーピストというわけだ。しかし、面接が重視されたところに、どうやら資質の鍵がある。いくら仕事とはいえ、世界中で笑顔を振りまきながら、常に楽しそうにハープを弾き、それらはすべからく皇太子に恥をかかせない立派な演奏でなければならない。われわれの想像を超えたプレッシャーがかかる。よっぽど明るく、ハープ好きでないと務まらない。要は、最後は人物重視なのである。赤毛のアンって、きっとこんな人だったのだろうなあ。屈託なく目をキラキラと輝かせながら、楽しげにハープへ向かう姿は、まさに音楽を通じた親善大使を絵に描いたようだった。ぜひ機会があれば、また彼女の演奏と笑顔に触れたい。

English Harp Invitation
英国ハープの誘い

アイルランドから本物がやってくる。

「マイケル・ルーニー、ジューン・マッコーマック&ミュージックジェネレーション・リーシュ・ハープアンサンブル 日本ツアー2020」の開催がそれだ。昨今のケルティック音楽の流行の乗せてというより、日本人ハーピストの情熱が手繰り寄せたと言ってもいい。日本人としては初めて2018年スコティッシュハープコンクール優勝、本場スコットランドでケルティックハープを学んできた松岡莉子の、本場のアイリッシュハープを日本で聴ける機会を作りたいという想いと、アイリッシュハープの新たな可能性を探りたいという学生アンサンブル「ミュージックジェネレーション・リーシュ・ハープアンサンブル」の指導者／ハープ奏者のシボーン・バークリーの想いが重なって実現へと漕ぎ着けたのだ。

注目すべきは、先ずはハーピストのマイケル・ルーニーだろう。英国王室での演奏・作曲も経験している、伝統的アイリッシュハープの巨匠だ。今回共に来日するアイリッシュフルートのジューン・マコーマックとの伝説のデュオは、重ねられた共演によって円熟しており、まさに本場の伝統的アイリッシュ音楽の真髄を味わうことができるだろう。そして、最も素晴らしいのが、日本の学生ハープアンサンブルや邦楽奏者と日本とアイルランドの伝統曲でコラボレーションが実現するという点。譜面なき口承音楽を是とする彼らが、日本側の出演者たちとの交流によって、何をどう伝承してゆくか。そして、またアンサンブルを含め来日するメンバーたちも、何を日本から感じ取ってくれるか。名手たちの演奏を単に指をくわえて観ているだけのイベントではなく、実際の競演による交流によって、相互理解が促進されることが実に意義深い。コンサートは、2020年4月5-11日に大阪・名古屋・横浜で開催予定。ワークショップも開催予定なので、積極的に参加してみよう。

◀招聘に尽力した松岡莉子も、アイリッシュ音楽に造詣が深いからこそ、その公演内容には大いに期待できそうだ。

English Harp Invitation
英国ハープの誘い

高まる期待 マイケル・ルーニーの日本公演

MICHAEL ROONRY, JUNE MCCORMACK &
MUSIC GENERATION LAOIS HARP ENSEMBLE
JAPAN TOUR 2020

KOJI AMADA Collection vol.6

Point of PERFORMANCE

演奏のポイント

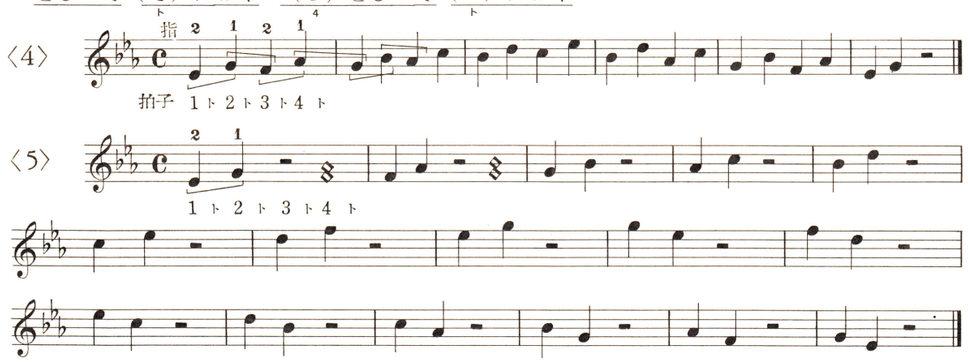
今回は重音の練習です。〈4〉から〈7〉では、1オクターブ下げて左手でも練習しましょう。指の形を覚えたら、曲で応用します。「思い出」における伴奏の重音は、二つの音が溶け合うように、よく聴きながら、左手だけの練習から始めましょう。「ガボット」は、メロディーが重音になります。肩と腕は堅くせず、指先を誘導するようにすると、雑音なく準備できるでしょう。

3度音程による　指の動きの練習

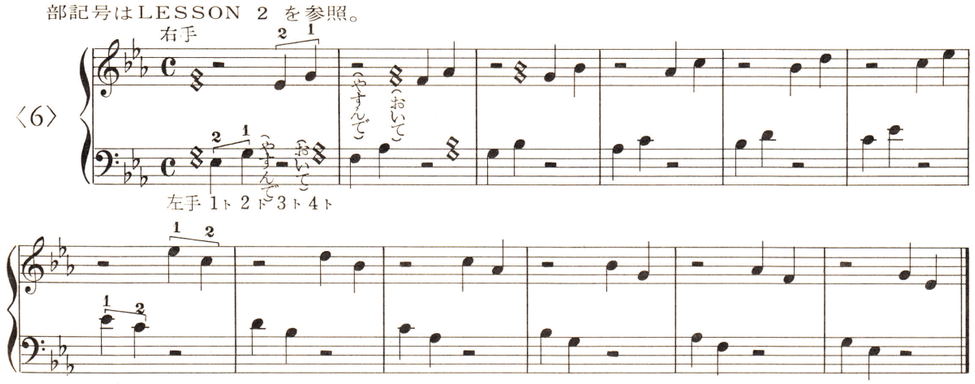
右手・左手をじゅうぶんに練習したら，次は両手いっしょにゆっくり練習します。

手の形をくずさないように，１小節だけをくり返し，楽にひけるようになれば先へ進みます。手くび・指関節の力を抜いて，いつも楽にしておくことを忘れずに。また，練習〈１〉～〈３〉の復習もじゅうぶんにしましょう。

〈４〉２指（み）をひいて（ふぁ）におく　１指（そ）をひいて（ら）におく（ふぁ）をひいて（そ）におく　（ら）をひいて（し）におく

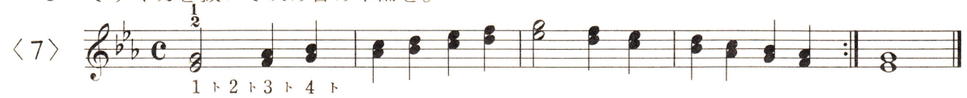


〈６〉の左手は低音部記号（ヘ音記号）ですが，位置は右手のオクターブ下です。低音部記号はLESSON ２ を参照。



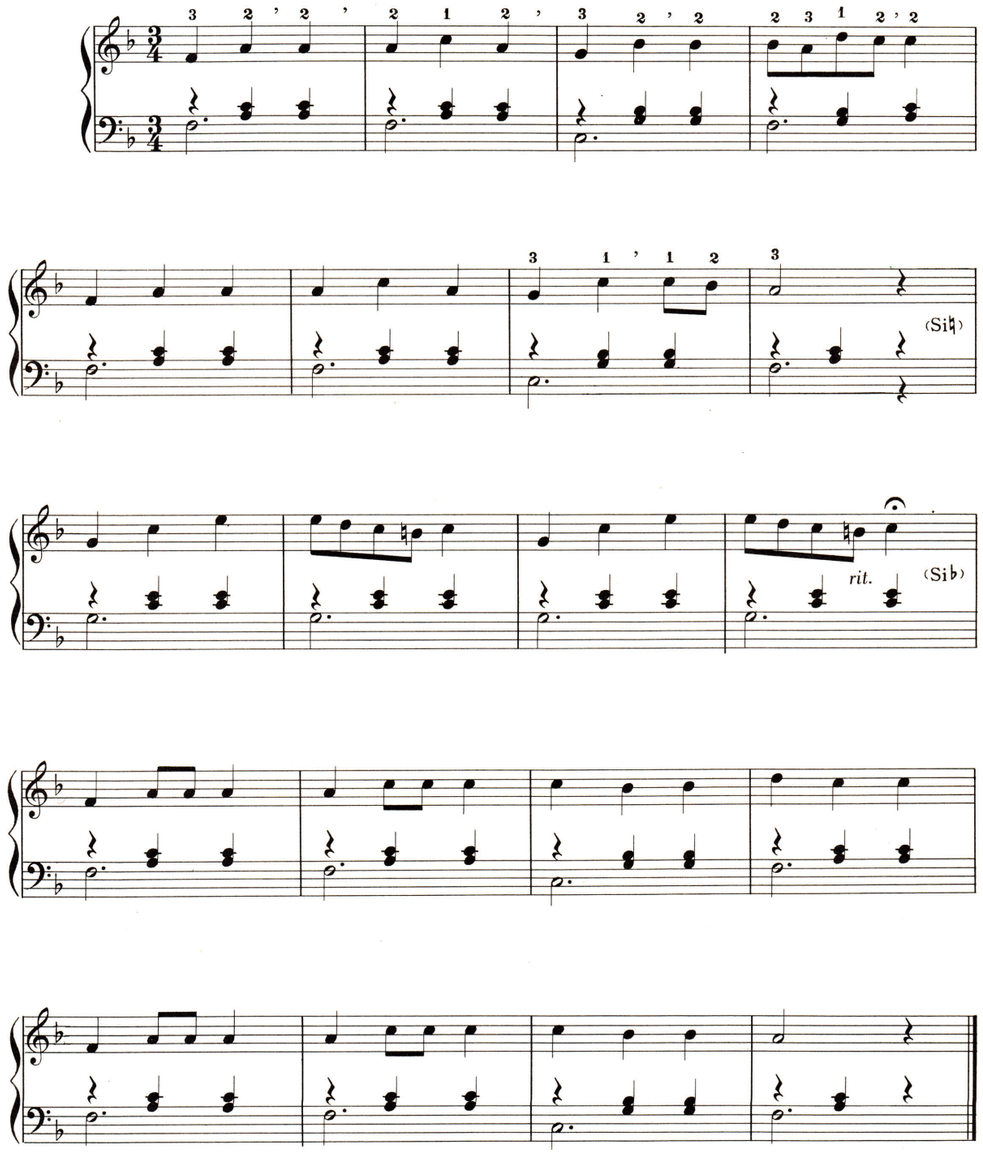
〈７〉は２指（み）と１指（そ）を同時にひきます。

指の動きは今までと同じに，指先が手のひらに着くまで，指関節を深く曲げてひきます。ひいてすぐ力を抜いて次の音の準備を。



応　用　練　習

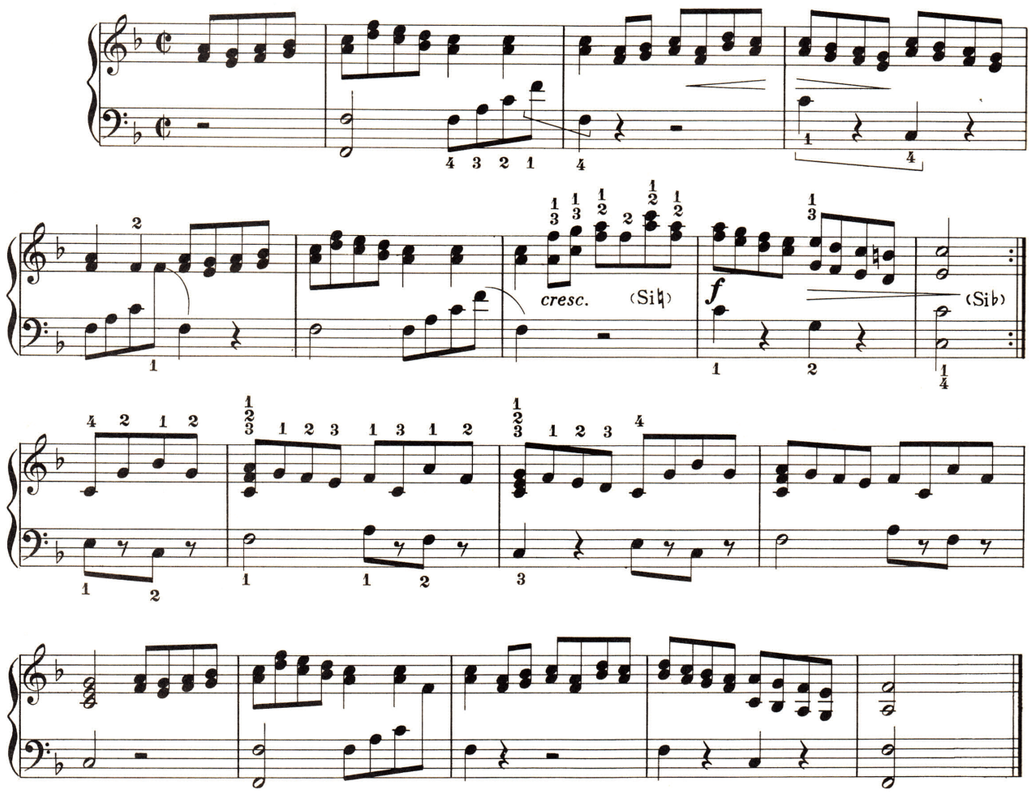
〈思い出……ドイツ民謡〉



KOJI AMADA Collection vol.6

ガ　ボ　ッ　ト

グルック



季節のおすすめハープ Vol.10

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「ダイアナ」です。

これぞサルヴィ精神を具現化した、同社の代表作と実感。

どんな商品でも、ロングセラーであるということは、いかに多くの方に愛されているかという証明であるといえるでしょう。サルヴィハープのラインアップにおいては、このダイアナがまさにそれです。

世間にはびこっている誤解のひとつに、「汎用品はラインアップの平均値」というのがあります。むしろ、ロングセラー商品にこそ常に最新の技術や粋を凝らすのが、物を造る一流企業の姿勢と聞きます。ハープでいえば、入門用～上級・プロ向けが揃う中で、まさに中堅から上級者向けのダイアナに、価格の面からも人気が集中することから、汎用と誤解されるケースがあるのでしょう。ダイアナは、いかにもハープらしい、バランスよくまとめられた外観と優れた操作性から、今まで実に多くのハービストたちが手にしてきました。つまり、ボリュームゾーンに受け入れられてきた＝サルヴィの汎用品というレッテルが付いたものと想像されます。しかし、プロの見る目はその真逆。「他社の同じ価格帯のクラスのハープとは比較にならない傑作」とすら呼ぶ人もいますし、ダイアナの紡ぎ出す音そのものに惚れ込むプロも存在します。精巧な彫刻、響板に施された手書きの装飾、新たに大きくなったサウンドボックス、細部にいたるまで妥協を許さない仕上げ。手にした人なら、それが妥協の産物どころか、これぞサルヴィ精神を具現化した同社の代表作と実感できることでしょう。

本号でも記事掲載されているイオン・ジョーンズ氏が、銀座十字屋でダイアナを試弾した際、「なぜ、これを草加（コンクール）に持ってこなかったんだ!」と叫んだそうです。同コンクールで模範演奏を披露した際、居合わせた人々が「さすがの音色と存在感に圧倒された」というぐらいのジョーンズ氏が、弾きこまれたミネルヴァという上位機種よりも、時として彼のようなビッグ・サウンドを好むプロでさえ魅了される魔力が、このハープにはあるようです。

Diana
ダイアナ

Harp Caravan

ハープ・キャラバン第8回

ブランディー・ヤンガー

ハープで奏でるジャズというと、デボラ・ヘンソン=コナントの名が挙がる。自分はこれに違和感を覚えていた。無論、デボラの演奏にケチをつけるわけでない。たぶん、彼女自身もそんなレッテルを貼られるは迷惑だと思う。確かに彼女の演奏は、前衛的でジャジーではあるし、エッセンスや語法としてのジャズは用いてはいるが、はっきり言ってあれはジャズではない。では、ジャズとは何か。簡単である。ブルースとスイング。この2つの要素が、まるで前輪と後輪のように設えられ、展開されていく音楽をいう。

ブランディー・ヤンガーの登場は、衝撃だった。単に“ジャズを弾くハーピスト”の登場というよりは、クラシックの素養があり、出自であるR&B,ポップス、ヒップホップ、そしてジャズを消化し、今後のNY音楽シーンを牽引するひとりとして目されているからだ。かつて、ドロシー・アシュビーやアリス・コルトレーンといった女流ジャズ・ハーピストがいた。かなり斬新で演奏も素晴らしい女王たちだったが、いかんせん生まれた時代が早すぎた。長らく空席だった、まさにその席を埋めるかのごとく、彼女はシーンへ躍り出た。深くジャズを理解し、そこへポップスやヒップホップ、時にはフォークな響きまで寄せて、ハープという他に担い手が少ない楽器をむしろ武器にして、シーンを睥睨(へいげい)している姿が、何とも頼もしいのである。

Brandee Younger

「運命的だったわ。アリス・コルトレーンの葬儀に際し、息子のラヴィが、私に彼女が演奏してきたハープを会場で弾いてほしいと電話してきた。まさか私が、伝説の一翼を担うことになるとは思ってもみなかった」。

モダンジャズ界の巨人ジョン・コルトレーン。その妻アリス。父の遺志を継いだラヴィ。分かり易くいえば、歌舞伎に例えるなら成田屋から声が掛かったようなもの。その後、テナーサックス奏者であるラヴィとも共演、徐々にシーンへ溶け込んでいった。ラヴィも闇雲に電話をかけたわけではない。地道だが、印象的な彼女のパフォーマンスは、実はシーンですでに話題だったのだ。ラヴィの慧眼は、単に亡き母の影響を認めただけでなく、黒人の女流ジャス・ハープの開祖ともいえるドロシー・アシュビーによる一般にも分かりやすいソウルフルなエッセンスも感じ取っていたようだ。程なく、彼女のブラック・ミュージックの旗手としての素質が、本場NYでも広く注目されるようになったというわけだ。最新作「ソウル・アウェイクニング」は、大袈裟かもしれないが、まるでコルトレーンが遺した名盤「至上の愛」のような音場の佇まいと奥行きを感じる。ヤンガーは、それほどの逸材なのである。

「最初は、トロンボーンを吹きたかったのよ(笑)。しかし、ハープに出会い、その響きに魅了され、どんどんのめり込んだわ。私の世代は、クラシックやジャズだけが周囲から聞こえていたわけではなく、自然にストリート・ミュージックやR&B、ポップスが耳に入ってきた。どんな音楽でも吸収すべきことはあるし、無駄などないの。それらに受けた影響が自分の音楽に反映されることは、とても自然なことだし、それに抑制をかける必要も感じない。今は多くの先人たちのレガシーと同じ系列に加われることを光栄に感じているわ」。

ブルーノート東京に続いて、コットンクラブと超一流のライブ・レストランに立つヤンガーの姿は、すでに女王の風格さえ漂う。ハープ・ファンとしては、そういうラグジュアリーな場で、ハープがメインの楽器として演奏されている光景がどこか誇らしいし、その品格が改めて素晴らしいと思える。マニアックにはなるが、ロバート・グラスパー、カマシ・ワシントン、クリスチャン・スコット、そして彼女を加えた4人の名を覚えておいてほしい。今後のジャズを動かしてゆく重要な演奏家になるだろう。すでに本格的ジャズの場でも、ハープは演奏されている。機会があったら、ぜひ彼女のライブに足を運んでみてほしい。

(編集長・森、取材協力/コットンクラブ)